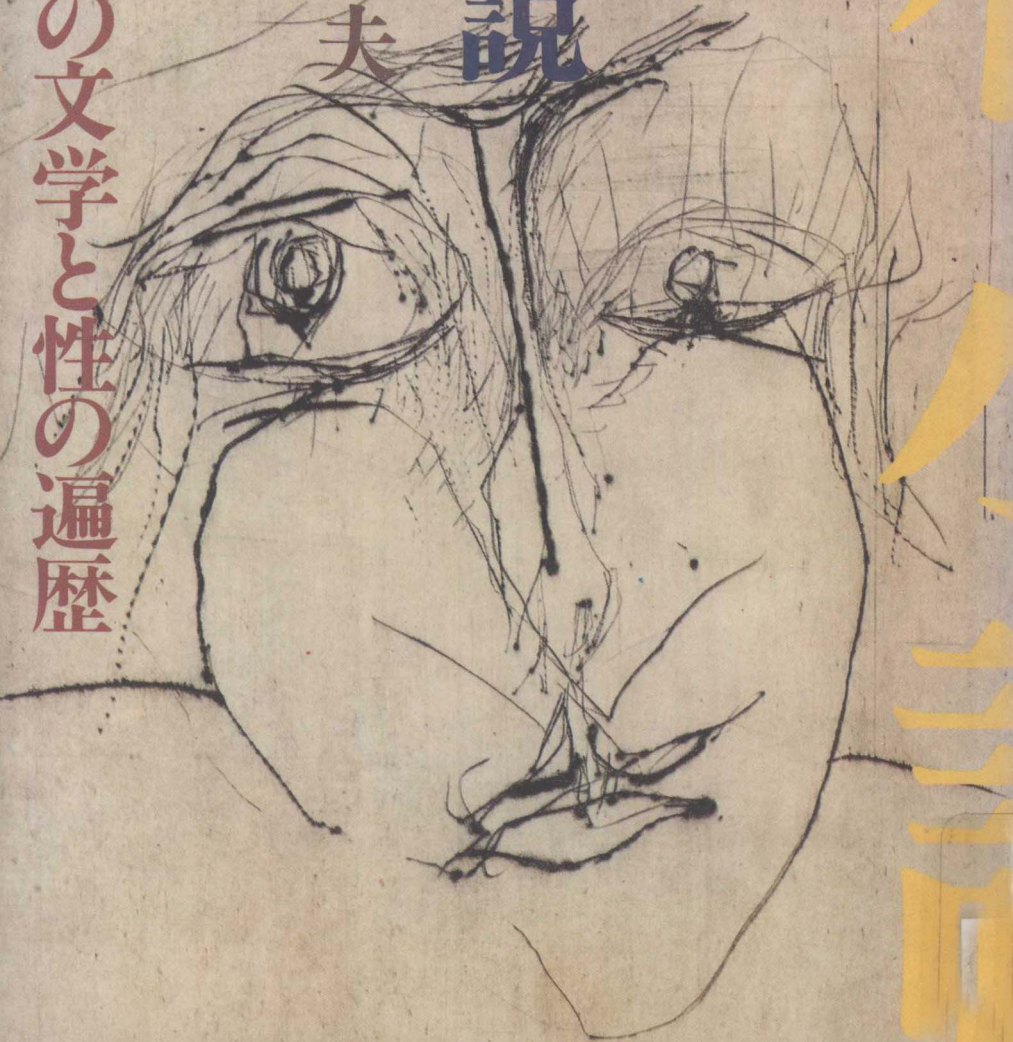


# 私小説

池田満寿夫

わが青春の文学と性の遍歴



三三三

# 私小説

池田満寿夫

わが青春の文学と性の遍歴



文藝春秋

著者略歴

昭和九年旧満洲に生れる。  
長野県立長野北高校卒。  
三十五年、第二回東京国  
際版画ビエンナーレ展文  
部大臣賞を受賞。昭和五  
十一年、小説「エーゲ海  
に捧ぐ」で第三回野性時  
代新人文芸賞受賞後、翌  
年同作で第七十七回芥川  
賞受賞。他に、「私自身の  
アメリカ」「思考する魚  
I・II」等著書多数。

私小説 わが青春の文学と性の遍歴

昭和五十五年一月三十日 第一刷

定価九百五十円

著者

池田満寿夫

発行者

杉村友一

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三  
電話(〇三)二六五―二二一

印刷所

共同印刷

付物印刷

凸版印刷

製本所

大口製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

私小説 わが青春の文学と性の遍歴 目次

プロローグ	5	ローマ・野尻湖・京都	118
太宰治	18	「人間の絆」	128
萩原朔太郎	32	カフカ・わが読書	141
同人雑誌	49	私小説的わが読書	153
二つの異邦人	63	ローマ・私の映画	168
性教育	78	「荒地」・スタイン・詩人	178
〈私〉小説の試み	91	ヘンリー・ミラー 子宮への回帰	193
森川町時代	104	ミラー・永遠の序章	205
		後記	219

著者自装

私小説

わが青春の文学と性の遍歴



母親が死んだのは七年前だった。日本に帰ると郷里の長野へは何回か必ず帰った。何年前か前、私はふいに思いたって、母親が丹念にしまって置いた私の母親宛の手紙や、中学、高校当時のノート類、ガリ版刷の同人雑誌、文集類などを東京のアトリエに持って来た。中型のダンボールの箱に二杯分はあった。持っては来たが中味を再び調べてみる気はしなかった。母親宛の手紙類は、ある経緯から最近出版することになったが（日付のある自画像）、ノート類は押し入れに放り込まれたまま私自身も忘れてしまっていた。

昨年、日本に一人で帰国していた時、なにかを探すため押し入れを掻き回しているうちに、それらのノート類が目に入った。自分一人でいるという感情が、それらのノート類にある懐しさを抱かせたようである。戦後間もなくの質の悪い仙花紙のノート類の中に、中学当時の綴方帳が何冊も見つかった。小さな字でぎっしりと書き込まれていて、教師の採点か題名の上についており、赤インクで批評まで書きそえてある。大方の綴方に最高点の三重丸がつけられている。中学当時、私は綴方（すでに作文といいかえられていたかもしれないが）と図画とがとび抜けて好きだったし、それらの成績も大変良かった。他の学課はほとんど一夜漬けで間に合わせていたのに、水彩画と作文だけは暇さえあれば写生に出掛けて描き、夜おそくまで机に向って書いた。当時の水彩



一枚も残っておらず、綴方帳だけが今まで残っていたのは不思議といえど不思議である。更にそれらのノート類のなかにその頃書いたとおぼしき『小説』を書きつけた一冊のノートが出て来たのには驚いた。小説を書いた記憶はあったが、それが母親の遺品のなかに残っていたとは考えても見なかったからだ。こんな小説の真似事にも母親は目を通したのだろうか？ 高校を卒業して東京へ出る時自分で処分しなかったのが失敗だったのだ。

小説は勿論母親の目を盗んでこっそり書いたものだった。情太郎といういかにも遊び人らしい名前の男が主人公で女房にびくびくしながら芸者にほれる話で、それを少年である『私』の目から書いている。高校生の時に書いたとしても、芸者なんかろくに知りもしないで、良くそんな主題で書いたものだとかきかされてた。阿部知二の『冬の宿』にえらく感激し、すくなくからずその小説に触発されて書いたような気がする。しかし知二を読んだのは、あとにも先にもこの時だけで、何故『冬の宿』に感銘したのか良く憶い出せない。高校時代はご多分にもれず太宰治にいかれていたのである。

太宰治の名は中学の時から知っていた。級のなかの成績のいいトップ・グループに、私よりもずっと背が高く、そして級の女生徒たちにも人気のあった男が、この太宰を読んでいたのである。成績の上で私もトップ・グループに属していたが、この男の人氣にはいつも負けていた。敗戦後まもなくの新制中学だったのでかつて小学校で行なわれていた最も成績のいい生徒を教師が指名するというシステムは廃止され、民主主義の最初のシステムとして、級長は級全体の投票で定めることになっていった。小学生の時は私が級長に指名される可能性は図画を含めて優が二つしかなかったのだから絶対になかった。そのもう一つが国語だったり歴史だったりしたが、それがいつも優とはかぎらなかつた。新制中学になったおかげで級の票さえ集まればその不可能だった

級長になれる可能性が出て来たのである。私が級長になりたいという理由はたった一つしかなかった。これも民主主義のおこぼれとして新制中学は男女共学になっていて、級長は（もうその頃は級長とはいわず学級委員といわれたが）男子生徒と女子生徒から選出された二人がなった。級委員に選ばれた二人の男女生徒は級会や、学校全体の学生大会などでいつもカップルで級会の司会や級の代表として行動する義務があった。時には二人だけ放課後に残り、打ち合わせをすることがある。私にはその学級委員に与えられた公然としたチャンスがとてもうらやましかつた。なにしろ、中学になるまで男女共学を経験したことのない私には、中学になって女生徒と席を並べていても、打ちとけあつて話をするという工合にはいかなかったし、隣の机にいつも気に入っていた女生徒がくるとは限らなかったからである。机の着席順は身長の高さを基準にし、一学期ごとに、少しずつずらしていき同じ男女生徒が常に一緒に配慮がなされていた。だから学期がはじまり着席順が教師によって配分される最初の朝は、今度どの女生徒が隣りにくるか胸がときめいた。しかし私がめざしていた女生徒は背が高すぎたせい、か、どのよう配分を変えられても私の隣りには来なかった。一学期だけ私の真後ろに来た時が最も接近出来たチャンスにすぎなかったのである。私の隣りにはいつも頭の悪い、めだたない女生徒が配分された。疑いもなく私の好きだった女生徒は級でもクインだった。しかし級委員の選出ではクインに票は集まらなかった。男生徒のクインに対する人気が女生徒側に強力な反撥を買っていたからである。成績順でいけば私も最有力候補だったのに、ついに一度も選出されたことはなかった。

（小学校で成績のかんばしくなかった私が新制中学で級の一、二を争うほど突然成績が良くなったのはいくつもの理由がある。本来私は小学校から旧制中学を受験するつもりだったのが、小学六年の三学期に中国からの引揚げで転入し、担当の教師が学力不足を理由に旧制長野中学

の受験願書を許可してくれず、やむなく柳町小学校高等科へ進んだのである。一年、高等科で留年しているところへ新学制改革、いわゆる六・三・三制が実施され、高等科の生徒は新制中学二年に編入されることになった。つまり新制中学の私の学年は旧制中学の受験に失敗し留年した連中と、はじめから中学へ行く気がなく、なにかの理由で高等科だけに進学して来た連中との混合軍であったのだ。そうした低レベルの級で、これも学制改革にともない採点方法が成績の絶対数を基準にするのでなく、級全体のパーセンテージで5・4・3・2・1と基準が配分されたから、学期試験の点数が低くても、それ以上低いレベルを基準にして配分されると、最高マークの5をもらうことになる場合がある。苦手の英語で三分の一しか正解出来なくても私は4から5をもらっていたのがいい例である。

自分でも劣等生に近いと思っていた私がいつの間にか級のトップ・グループに入っていた時は驚いたが、結局旧制中学の脱落組のなかでの評価ではないかと疑っていた。だからいかに通信簿の成績が良くても、自分を頭のいい生徒だとは考えなかった。新制中学の初期はまだ○×式が徹底しておらず、文章で答えを書く試験が多かった。国語、歴史、社会は当然として、理科でさえそうだった。多分その答案形式が私の成績に有利に作用したのであろう。文章にする答案にはいささかの自信があったからである。記憶力は恐らく欠如していたが、文章による表現力で、うまくつじつまを合わせてしまうのがうまかったのだ。新制高校へ入ってから成績がきわめて悪くなつたのは、旧制中学からの同期生と混合されたからでもあったが、○×式が徹底されて来たせいもあった。国語の答案でさえ、自慢の文章力を見せる機会はなく、さんたんたるものだった。いや高校になって突然出て来た文法と古文とが私を滅入らせてしまった。英語の答案も駄目、国文学の答案も駄目、そんな生徒がこっそり小説などを書いていたのでから奇妙な気がする。

太宰治を読んでいたその生徒は（仮にノッポと命名する）男子生徒のなかで一番背が高かったので必然的に女子生徒で一番背の高かったク、イン、と着席の隣り合う機会が多かった。隣り合わない場合でも彼等は常に近接した机に配分されていた。私とノッポはトップ・グループに属していたが、平常からあまり親しいわけではなかった。彼は少々不良じみたジェスチャーを示し、何人かの男子生徒を自分に従えていた。私はいえ、マジメ・グループに属していた。そしてノッポのように小グループのボスになる才覚は持っていなかった。誰の自分にもならなかったかわり、誰のボスにもなれなかったのだ。親友はいつもいたが、私と親友とは対等な関係を保っていた。この性格は中国の小学生の時から少しも変わっていない。だから級全体からみると、私は孤立しているように見えたはずである。ノッポとそのグループは女生徒たちをからかったり、いたずらしたり、時には公然と反目し合ったりしていた。それにもかかわらず彼は女生徒たちに人気があった。私の親友の二人のうち二人ともが級委員に選出されたが私だけはどうしても選出されなかったのが不満であった。男子生徒の間でまんざら人望がなかったわけではない。多分担任の教師からの人望が一番あつたはずである。級の生徒たちは、私が担任から特別あつかひされたヒイキであると思つていたようなところがあつた。何故なら級の担任教師の専課が図画と国語で、いつもこの学課を抜群にほめられるのは、私と、ク、インの二人であつたからだ。そうした意味でク、インも「先生のお気に入り」で生徒間では陰口をたたかれていた。しかし最終学期の級委員の選出で、ク、インがとうとう女生徒から選出され、これが最後のチャンスだったのに、私には票が集まらず、ノッポが選出されてしまった。ノッポに激しい嫉妬を感じると同時に彼の愛読書である太宰治を憎み、意識的に太宰を読むことを敬遠した。太宰を知つたのは授業中に担任教師が、机の下で盗み読みしているノッポに注意を与えた時からである。奴から取りあげられた本は太宰の

「晩年」だった。教師の鋭くけわしい、そして軽蔑を含んだ視線とノツポのふてくされたようなそれでいて誇らしげな表情とを私は教師の側に加担して眺めた。

「こんなのは文学ではない」

教師が級全員に聞えるように言ったのが痛快だった。

担任教師の愛読書は吉川英治だった。機嫌のいい時は「宮本武蔵」の一節を徳川夢声ばりに暗誦してくれるのが得意で、また私たちもその時間を楽しみにしていたものだった。教師にとつての文学が吉川英治なら、太宰治が色事師であつてもなんの不思議もなかった。それでいてあやしげな雰囲気のある泉鏡花の「高野聖」をこれも暗誦してくれる時もあった。その他、芥川の「杜子春」とか有島武郎の「一房の葡萄」とか、いくつかのレポートリイがあつた。私が大人の読物を夢中になつて読みはじめたのは、引揚げて来た小学六年の時、親戚の未亡人から借りた「宮本武蔵」だった。講談倶楽部とか、講談全集なども、その未亡人から借りて読んだ。父親の義姉にあたり、物わかりのいい美しい婦人だった。それらの本を返しに行き、次の本を借りてくる楽しみの本心はこの美しい婦人に会いたいという期待だったようだ。戦後の混乱期に、彼女はきちんと和服を着て、いつも微笑で迎えてくれ、お茶を入れてくれる場合でも必ずお茶菓子が皿に乗っていた。しかしある日、突然この未亡人から本を借りるのを両親から禁止されてしまった。借りてくる本の内容のためなのか、未亡人のあらぬ噂のせいなのか、私には理解出来なかつた。結局「宮本武蔵」は全巻読まないうままになつてしまつたのだ。私には武蔵よりも脱落した又八の方に興味があつた。武蔵を追慕している朱実という女にも、汗に混つたあやしげな体臭を感じた。男が女から追われる、そのテーマは小学生にとつてまぶしいような、胸くそ悪いような気がした。不敗の勝者である武蔵にはなんとなくやりきれない気持が残つた。この男は人間ではない、と子

供心に思うところがあった。

太宰治が入水自殺をしたのは私が中学三年の時である。それまで私は太宰の名を知らなかった。第一、太宰治を、ダザイ・オサムと読むことすら知らなかったのだ。私の見た新聞には確かに「入水自殺」とあった。その語感がひどくワイセツに思えた。男と女が体を縛り合って入水する。しかもそれは長野にいた少年にはかつて聞いたこともなかった玉川上水であった。その玉川上水なる上水の意味がまた私には分らなかつた。水道用の運河であるらしいといふことは分つた。だが、何故そんな小さな川で人間が死ぬことが出来るのだろうか？ それが無思議でならなかつた。自殺をするなら、どうして大きな河にしなかつたのだろうか？ 太宰治の名前さえろくに知らなかつたので、この著名な作家に対して最初の私の反応はかくのごとく冷淡なものだつた。その入水自殺はどう考えても不様に写つた。どんな場合でも自殺の記事を新聞で見ると、安っぽい新聞用紙と、粒子の荒れた現場写真とが人間の崇高な行為を色あせたものとして印象づけ、どのような死の方でも、それが新聞用紙に印刷されると犯罪的な気分を起させた。

私のなかで太宰治はすでに犯罪者であつた。その太宰を読んでいるノツポも犯罪者と同格であつた。ノツポは授業中に太宰を読むことを禁じられたが、休憩時間まで禁じられたわけではなかつたので、今度は寸暇を惜しむように、いかにも見せびらかすように、休憩時間に太宰を読むようになった。平常、私にとってノツポは決して文学少年としてライバル意識をかりたてる類の存在ではなかつたし、綴方でも私の方が遙かに教師に評価されていた。気になることといへば女生徒たちに人気があり、クインと席がいつも隣り合つていて、お互いに不愛想な顔付きをしていて、内心は手を握り合つてゐるのではないか、という疑問であつた。男子学生だけの旧制中学に對し、男女共学の新制中学生だつた私たちは、もともと旧制中学へ入学出来なかつた劣等感に加

えて、不良ぼくいえばメンス臭い女子生徒と席を同じくすることに、いささか恥じらいがあった。女生徒に対する好奇心がいっぱいだったくせに、故意に敵対している態度をとったのは、いわば旧制中学生に対するばつの悪さからであった。私たちの学年から下は、もう旧制中学と新制中学との差別はなくなっている。

ノッポの太宰を読んでいるという大っぴらなデモンストレーションは、私に対する文学少年としての挑発に写った。ある日私はいかにも何気ない顔で「太宰は面白いかい？」と聞いてみた。「別に面白くもないな」ノッポは、仏頂面でいかにもめんどくさそうに答えた。そんなら、なぜ読むんだ？ 私がそう反撥しなかったのは、太宰について論争しても勝負がなかったからである。なにしろまだ一行も読んでいなかったのだから。それでも太宰を中学生が読むことに禁断の実を齧る恍惚さを予感しないわけにはいかなかった。

問題は太宰治の本をどうして手に入れるかだった。今考えても奇妙なことだが、当時はそれを買い求めるといふ考えがまるで起ってこなかった。両親がカツギ屋をしていて、家計は三人が食うだけでいっばいだったから、教科書以外の本を買うことは私には大事業の一つだったのだ。中学当時お小遣いをもらって自分で購入した本は数冊にも満たない。文庫本のモーパッサンの「女の一生」、志賀直哉の「小僧の神様」、それに伊藤廉の「絵の話」という名画解説ぐらいなものだった。家には両親の蔵書に文学書は一冊もなかったばかりか、買ったばかりのモーパッサンの「女の一生」は母親にいち早く隠されてしまった。中学生のくせにまだ早いと小言を言われたのである。文学にはまったく縁のなかった母親が、モーパッサンの「女の一生」を彼女自身で読んでいたかどうかさえ私には未だに謎の一つだが、すくなくとも中学生には読ませたくない類の本の一冊であると認識していたことが不思議だった。隠されてしまう前に三分の一ほどは読んでし

まっていたが、本当のところ、私には少しも面白くなかった。最初の無削除版という宣伝だったにもかかわらず、いったいどこが性的場面なのか、さっぱり分らなかつたのだ。後になってモーパッサンの他の短篇は随分読んだけれど、「女の一生」は母親に取りあげられてしまった理由ではなしに、つまらなかつた理由で再び読もうとはしなかつた。しかしこの時の経験は、文学にも禁じられた文学があるんだなという胸騒ぐ予感を深く心に植付けられた。モーパッサンの「女の一生」にくらべれば、父親が東京から買って来たカストリ雑誌の方が遙かにどぎつく、性的亢奮を起させた。両親が買出しや、出かせぎで留守の夜など、床のなかで読む「りべらる」や「猟奇」などのカストリ雑誌は、中学生の私のペニスをやが上にも勃起させた。性的亢奮で頭がぐらつくような感覚を味わつたのは、この時がはじめてだったが、勃起した生物をどう処理していいのか、方法を知らなかつた。「自慰」という意味が私には完全に理解出来ていなかったのだ。信じられないことだが、「自慰」の意味と方法を識つたのは高校の三年の時だったのである。性交の意味を識つていながら、「自慰」の方法を識らなかつたのだから、奇妙な話だ。欲情した時のあのけだるい感じは、どこにも持つて行きようのない秘密の重石だった。文学はそれを解消してくれるどころか、ますます重石の重量を増していくだけだった。

別の級に同じ高等科から進学して来たヤマがいた。彼は私よりも遙かに文学的に早熟でリルケにいかれていた。太宰の本を借りたのはそのヤマからだ。この生徒は友人から借りた本は決して返して寄こさないのので有名だった。少年雑誌や冒険物を又貸して、どうしても返してくれなくて困つたことがしばしばあった。私はいかにも大人の文学書を読んでいるふりをしていたが、熱中して読んだのは戦前に刊行された山中峯太郎や海野十三、佐藤紅緑などの少年読物を古本屋や友人たちから借りて来たものだった。教師からの影響で吉川英治の「三国志」も友人から借り



て読んだ。こうした読物は確かに時間を忘れさせてはくれたが、作文のお手本にはならなかった。私が作文のお手本にしたのは志賀直哉であった。「小僧の神様」と「城の崎にて」が国語の教科書に出ていて、あの簡潔で断定的な文体が、私にひどくアツピールしたのである。私は志賀直哉から文節の切り方を学んだ。だからだと文節が続くものより、断定的にたたみかけるように切った方が、いかにも男性的で気持よかつた。それから文学の不機嫌さも習った。不機嫌な文学とも言えるかもしれないが、私には直哉流のやや高踏的な、反俗的な觀察者の不機嫌さを、純文学の一つの姿勢として理解するところがあつた。文章のなかでめそ泣いても、げらげら笑つてもいけない。それが純文学であつた。大袈裟な表現は出来るだけひかえなくてはならない。そうすれば文章はおのずから大人びたものになる。接統詞を多用してはいけない。擬音も最少限に使うべきである。これ等の教訓は私の作文術に大いに役立った。最も私が苦心したのはプロットの立て方であつた。

「朝眼がさめて顔を洗つて歯をみがいて学校へ行つた。今日は遠足だといふのでみんなはここにこしていた。……そしてたくたくに疲れて帰つて来た。」といった調子の作文を書いている同級生のなかで私の遠足の作文は確かにユニークであつた。朝起きてを省略し、途中を省略し、いきなり目的地に着くといったやり方だつた。多分この頃私が最も影響を受けたのは加藤武雄の「小説の書き方」からだつたかもしれない。今では加藤武雄など知っているものはごくまれだが、當時では菊池寛と並んで大衆小説の流行作家であつた。私は「りべらる」や婦人雑誌等で加藤武雄のいくつかの小説を読んでいたが、「小説の書き方」をどうしても欲しくて東京へ出かせぎに行く父親にねだつて買って来てもらったのは、なにも加藤武雄が特に好きだつたわけでもなんでもなく、その頃この種のハウ・トゥー物は、小説に関してはこの本しか目に入らなかつたからである。